

連合教職大学院 院生通信

令和5年度 Vol.6

INDEX

修了生紹介、インタビュー

特別企画記事

編集後記

発行元

大阪市教育委員会事務局 総務部 教育政策課
大阪市教育センター 教育振興担当

今回は、連合教職大学院（以下、大学院）を昨春修了し、教頭としてご活躍されている方へのインタビューを中心にお伝えします。



R4年度
修了生

大阪市立本庄中学校

教頭

辰巳 慎太郎 さん

辰巳教頭先生は、高度教職開発専攻スクールリーダーシップコースに在籍されていました。

研究テーマとして、オンライン学習を取り上げられ、1人1台学習者用端末を用いた新たな学習について、深い知見をお持ちです。

また、大学院での学びと並行して大阪市教育センターでの勤務もご経験されました。



本庄中学校は、東成区にあり、OsakaMetro 緑橋駅が最寄り駅です。
歴史のある学校で、校区にある3小学校（東中本小学校・今里小学校・中本小学校）と連携・協力を密にしながら、安全・安心な教育環境を構築しています。
校訓は「よい人となり、よい市民となる」で、自己実現・社会人としての自立と共に、社会に貢献できる力を身につける教育をめざしています。



協力関係を築きつつ マネジメントする



大学院での学びが、どのように活かされていますか。

現在、教頭という立場で校務の情報化を進めています。教育センター勤務の時は学校のICT推進に関わり、そのなかでも特に授業でのICTの利活用における業務に携わりました。これらの取組は、大学院での学びから直接、影響を受けているかもしれません。また、さまざまな取組を進めていくためには、先生方と協力して進める必要があります。協力関係を築き、マネジメントすることは大学院での学びが役に立っているのではないかと思います。

着任されてからのICTの活用状況を教えてください。

赴任当初、教育情報利用、パソコン（以下、学習者用端末）の活用にまだ伸びしろがあるように感じました。教職員と関わる中で、生徒に学習者用端末を授業の中で使わないといけない、という意識を持ちながらも、活用させる方法に課題を感じているということがわかってきました。

一学期は、学習者用端末の持ち帰りやルーターの整備状況の確認、区役所が行っているライズeライブラリアドバンスの初期設定などを実施しました。また夏休みには、これまでしおりに直接書くところを、クラウド上でアプリケーションに記入する取組をしました。

取り組みやすいところから始めることで、少しずつ発展がみられました。勢いがついたことで、今では教職員一丸となって、気合いを入れて取り組んでいるところです。

二学期からのICTの活用についてはどのように取り組まれましたか。

二年生の職場体験では、活動中の写真を使い、スライド発表に取り組みました。作成したスライドは、次年度の職場体験の事前指導の資料としても、活用できると考えています。また、二学期末の三者懇談のときに生徒から保護者に発表する機会も作りました。このような思考・判断・表現の表現に力を入れた、系統的なキャリア教育につなげていきたいと考えています。

また、一年生の職業調べでも、スライドを作り、発表しました。まず、生徒が、保護者に保護者の仕事内容や必要な資格などについて、インタビューを行いました。それらをもとに、一人ひとりがスライドにまとめました。完成したスライドを学級や全体発表しました。さらに、保護者にも発表し、発表の仕方やスライドの構成についてフィードバックをもらいました。学習者用端末を家庭でも使うことで、どのように活用しているかを知ってもらうことができました。

保護者からは「自分の子どもがパソコンをこんなに使えるとは思わなかった」や「調べの内容やどんなスライドで発表するのかを家庭で話をする機会ができて良かった」、「私たちの意見を聞いてよりよい発表スライドになった」という声をいただきました。

取組の成果をどのように感じられていますか。

先ほどお話しした取組は、学年の先生方の提案や主導で進めていただいています。様々な取組でICTを活用することで、生徒の情報活用能力を高めていくとともに、各学年に関わる教員で共有することができました。今後は各教科で、ICTの活用をさらに進めていきたいと考えています。



職場体験をスライドにまとめる活動
(本庄中学校HPより)



期末懇談で、プレゼンする様子
(本庄中学校HPより)



英語科での学習の様子
(本庄中学校HPより)

校務でICT活用を進められているということですがどんなことですか。

職員室で先生方にクラウドの便利さを実感していただくことが重要だと考えています。まず教頭職について、動静表の管理が非常に煩雑だと感じました。冬休みの動静表はOutlookを使い、一括管理し、職員室の大型モニターで見られるようにすることで、先生方にアプリに慣れる時間を取りました。



職員室では、教職員の皆さんと気さくにお話しされている様子が印象的でした。



校外学習でも活用されています。
(本庄中学校HPより)

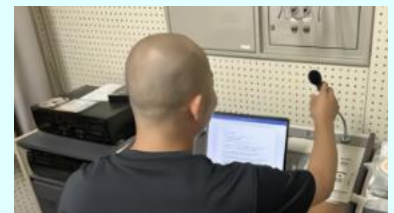
ICT活用を進めていく上でのアイデアはありますか。

ICTの活用が苦手な先生方もいらっしゃるのですが、心がけたことは、マーケティング施策においてよく使われる「普及率16%の論理」です。教員全体のうち、16%の先生方（ICT担当教員と学年主任）に先駆者となってもらい、その先生方が徐々に職員室全体へ伝え、浸透させるように取り組みました。

教頭としてのやりがいを教えてください。

学習者用端末の活用が進んでいっていることに対する保護者の反応は良いみたいです。やらされているのではなく、生徒のために教員が主体的に取り組むことが大切だと思います。教頭として職員間の潤滑油になることを心がけています。

ただ教頭としての業務が立て込んでしまい、自分の子どもの送り迎えが難しくなることがあり、プライベートと仕事の両立の難しさを感じています。



朝の放送で、端末持ち帰りについて呼びかける様子
(本庄中学校HPより)



対談中の様子、終始和やかな雰囲気でお話いただきました。

教頭として大事にされていることはありますか。

風通しのいい、なんでも話のできる職員室にしたいと思っています。そして、可能な限り話し合いを行った上で、責任をもって管理職が運営上の決断を下すことが大切です。本庄中学校で近藤正宏校長先生と仕事をすることで、改めて大事だと思いました。

大学院での学びを考えられている方へのメッセージやアドバイスをお願いします。

私は工業系の大学を卒業しました。縁があり教職に就き、仕事を進める中で、教育について深く学びたいと願っていました。大学院で、日々の授業やゼミ、レポート提出に追われながらも、様々な校種や年齢の先生方と交流できたことは貴重な経験でした。

現職教員が改めて大学院で学ぶことで、理論と実践の結びつきが深まり、教育現場で活かせる知見が深まったと思います。スキルアップを考えられている方は、ご検討されてはいかがでしょうか。

今回は、大学院の援助ニーズ教育実践コースで学んだ視点を用いて、起立性調節障害と診断された子どもたちが困っていることや、学校または教員ができることについてご紹介します。



特別企画記事

起立性調節障害と子どもの援助ニーズ

<参考文献> 田中英高(2017)「起立性調節障害の子どもの正しい理解と対応」中央法規出版

起立性調節障害とは ～診断方法と診断基準～

起立性調節障害(以下OD)とは、思春期に発症しやすい自立神経機能不全であり、100万人はいると推定されています。ODの検査に使われるのが「フィナブレス起立実験」です。ODではない子どもたちは起立直後に一過性の血圧低下を認めますが、平均17秒で回復します。ところがODの子どもは、起立直後に大きく血圧が低下して回復に25秒以上かかったり、20秒以内でも平均血圧の低下が60%以上も強かったりすることがあります。このような起立後の異常な低血圧をODの判定基準としています。

そして、血圧や心拍数の変化の違いによって、次のような4つのタイプに分類できます。

「起立直後性低血圧」

起立直後に立ちくらみやめまいを起こします。

このタイプが一番多いと言われています。

<症状> 気分不良、失神、全身倦怠感、朝起き不良、入眠困難

「体位性頻脈症候群」

起立中に血圧低下を伴わず著しい心拍増加を起こします。

<症状> 全身倦怠、頭痛 ふらつき

「血管迷走神経性失神」

起立中に突然の血圧低下、意識低下や意識消失を起こします。

<症状> 顔面蒼白、冷や汗、徐脈、稀にけいれん発作

「遷延性起立性低血圧」

起立後に動悸、冷や汗、気分不良が見られます。

あらかじめ知っておくことで、適切な対応につながるかもしれません。



診断を受ける子どもの特徴の例

<発症前から潜在している心の特徴>

- ・細やかな心配りができて、周囲の人たちにとっても気を遣う性格傾向がある。
- ・学校などの集団生活でも自分の感情を抑制し、友達に合わせて行動したり、周囲の期待に応えようとしたりする。慢性的にストレスを感じ、無意識に溜め込んでしまう。

<発達障がいの子とも>

- ・障がいからくる生きづらさによって、「自分はダメな人間なんだ」と思いがちで、自尊心が低下し、自律神経系が影響を受けて、ODになることがある。

子どもの援助ニーズ

子どもの状態の例

- ◆午前中～昼過ぎまで元気がなく無気力、夜になると元気になり、活気が回復する。
- ◆夜ふかしや朝寝坊になる。
- ◆全体の50～60%が不登校を併発する。
- ◆脳血流の循環調節ができず集中力、判断力が低下するため、成績が低下する。
- ◆暑さに弱い。

<季節による症状変動>

春～梅雨…非常に悪い
秋 …軽快



ニーズに応えるための学校の対応の例

- ◇朝の迎えは本人と保護者の希望を聞いた上で行う。
- ◇家庭訪問を拒否しだしたら、不登校児童生徒への対応も取り入れる。
- ◇欠席連絡ではなく登校できる日に連絡してもらうようにする(保護者の心理的負担を軽くする)。
- ◇フレックスタイムで登校を支援する。
- ◇調子が悪くなったらすぐに保健室に行けるように環境を整えておく。
- ◇静止状態の起立は3～4分程度にする。
- ◇水分補給をしやすい環境をつくる。

編集後記

今号では令和4年度に大学院を修了された辰巳教頭先生に、大学院での学びや経験を学校現場にどのように活かしているかを中心にお話を伺いました。大学院で学んだことや、大阪市教育センターでの勤務の経験から校務でのICTの活用推進も精力的に行っていることとお話いただきました。興味を持たれたことについて追及し、自らの力とし、それを周りへと還元をされてきたお話を伺うことができました。また、学校現場での課題を教職員と協力し、考えていく姿勢を拝見し、大学院は、学び続けることの楽しさを知る場所であり、そして、特別な経験ができる場所なのだ改めて実感しました。

今年度院生通信をお読みくださった皆さま、ありがとうございました。来年度も大学院の魅力ある情報を発信していきたいと思っております。よろしく願いいたします。

発行者:大阪教育大学連合教職大学院 院生チーム